

# 「今」を見つめる塾生たち

## 塾内メディア団体、それぞれの視点

慶應義塾大学には、塾生や塾員、義塾関係者に向けたメディアを運営している塾生によるメディア団体が存在する。代表的なものが「塾生新聞会」「スポーツ新聞会」、そして湘南藤沢キャンパス（SFC）の「SFC CLIP」。座談会では、それぞれに関わる塾生に、団体としての特色やこだわり、情報収集と情報発信への取り組み、さらに個人としてそれぞれのメディアに関わるなかで得られたことなどについて話を聞いた。

## 塾生新聞会



設立年  
1969年  
団体人数  
250名  
主な活動場所  
塾生新聞会  
三田オフィス

1969年創立。『慶應塾生新聞』は3月を除く年11回の発行。報道は「不偏不党」がモットー。掲載内容は、大学内のイベント・講演会や関連情報、体育会の試合結果や学生団体の活躍、塾生・塾員の活躍、教員・著名人のインタビュー記事、就職活動情報、その他会員による企画記事など、義塾関連を中心に多岐にわたる。団体内に「代表局」「編集局」「広告局」「財務局」「読者広報局」「デジタル戦略局」といった6つの内部組織を持ち業務分担を行っており、「真面目さと楽しさ」の両立を目指して活動している。



PEN ペン

# スポーツ新聞会

1978年、『慶應スポーツ』を創刊。現在、Webを中心とする報道を行い、通常年間6回、観客や選手が試合を見ながら読める新聞として、歴史と伝統のある早慶戦やその他の試合当日に配布するスポーツ新聞の作成も手掛ける。選手らが見せてくれる感動やその瞬間の躍動を塾生や塾員に伝え、質の高い新聞を作り続けられるよう日々活動をしている。新聞はレイアウト、写真、記事の全てを会員の手で行い、試合だけでは見られない選手の裏話や、表には出てこないマネジャーの記事など部全体に光が当たるように心がけている。



設立年  
1978年  
団体人数  
60名  
主な活動場所  
三田キャンパス

2001年3月、中島洋政策・メディア研究科教授(当時)の研究室のプロジェクトの一つとして開始。当初はメールマガジンとして展開したが、次第にSFCに特化したWebメディアとして発展。紙媒体はなくWebメディア専門で発行することで、情報の速報性と広範なアクセスを可能にしている。SFCの学事情報や学内の出来事など、日常生活を豊かにする情報を、塾生や教員、保証人、塾員などSFCに関わる全ての人に届けることを目的として活動している。

## SFC CLIP



設立年  
2001年  
団体人数  
30名  
主な活動場所  
湘南藤沢  
キャンパス



# 塾生ならではの情報を 発信し続ける



——皆さんの団体はどのようなスタン  
スで情報の収集と発信を行っているの  
でしょうか。

稲山 慶應塾生新聞会（塾新）は会員  
数約250名という塾内最大規模を誇  
るメディアです。私たちのモットーは  
「いつだって塾生目線」。塾生が何に関  
心を持っているのかを常に把握できる  
よう、いつもアンテナを張って情報収  
集を行っています。「真面目さと楽し  
さ」を両立し、WebサイトやSNS  
などでのインプレッションも参考に、  
塾生にとってのニュースバリューを考  
え、紙面構成と記事構成に取り組んで  
います。早慶戦の結果など速報性が求  
められる情報に関してはX（旧  
Twitter）で発信しています。今年度  
までは年11回、紙媒体を発行してきま  
したが、来年度は発行回数を減らし、  
Web版やSNSなどでの情報発信に  
いっそう力を入れていきます。



岡澤 現在、慶應スポーツ新聞会（ケ  
イスポ）はWebを中心とした報道を  
しています。レガッタ、東京六大学野  
球（春・秋）、ラグビーなど早慶戦の  
タイミングでは紙の新聞を作成し、試  
合当日に観客や選手に無料配布してい  
ます。また早慶戦以外でも大学生世代  
が注目するスポーツは積極的に記事化



法学部政治学科3年  
鈴木 廉君

しています。Web・紙面ともに、レ  
イアウト、写真、記事執筆など制作作  
業の全てを会員が手掛けており、制作  
費は会員が集めた広告費によって充当  
しています。慶應義塾体育会の各部と  
は密接に連携を取り、選手の裏話や、  
縁の下での力持ちであるマネジャーの記  
事などケイスポならではの記事もあり  
ます。また試合写真のクオリティは他  
のメディアに負けません。私は今年の  
レガッタ特集号の撮影のために隅田川  
を漕ぐ部員を小型ボートで追いかける  
写真が撮れました。思ったよりス  
ピードが速くて怖かったです（笑）。

深町 SFC CLIP（CLIP）は発足  
当初からSFCに特化したWeb専門  
メディアでした。現在は公式サイトのは  
か、SNSでの情報発信も行ってい



ます。SFCの学事情報やキャンパスのニュースなどの正確な情報を、社中や保証人などSFCに関わる全ての人に届けることを発行目的としています。編集会議は週に2日開催し、基本的に部員が書きたい話題を取材・執筆しています。もちろん夏の恒例イベント「七夕祭」や秋に開催される一大研究発表イベント「Open Research Forum (ORF)」といったSFCならではの話題については、毎年取材し、読み応えのある記事を作成しています。また早慶戦に関しても、SFCで学ぶ選手も多く参加しているため、各競技の試合速報やまとめ記事、選手インタビューなど、SFCメディアならではの視点から情報発信しています。

——情報発信の際に最も気を付けていることはなんですか。

鈴木 記事内容の正確性はメディアとしての生命線だと思っています。新聞の場合、見出しの付け方一つで記事内容が誤解されることもあり、何人もの目で記事の正確性をチェックすることが大切です。時間をかけて校正・校閲を行い、最後は印刷所で編集局スタッフ総出による最終チェックを行っています。



左より、岡澤侑祐君、深町優雨君、稲山昂大君、鈴木廉君

ます。校正・校閲などの方法はマニュアルを作って入局の際に教えています。近年はSNSなど新たな情報発信手段について積極的に行っていくためにも会員個人の情報リテラシーの向上

法学部法律学科3年  
いなやまこうた  
稲山昂大君



塾生新聞会 学生責任者

に留意しています。

岡澤 私たちも正確性には何より気を使っています。各競技の用語や表現、また選手の名前などを間違えうわけにはいきません。特に印刷入稿前には編集スタッフ全員で紙面チェックを繰り返して行っています。スポーツ新聞の場合も見出しの付け方は重要で、過去には勢い余ってミスリードを誘うような見出しを付けてしまった例もあります。そうした失敗も糧にしながら、わかりやすく正確な紙面を目指しています。

深町 私たちも、正確な情報発信はマストです。Webメディアとしての速報性を重視しながらも、学事情報などは日付や固有名詞が間違っていたら問題です。各スタッフが内容をチェックして、SNSなどでやり取りしながら、表現や表記の統一などを確認しています。私たちはコロナ禍で部員が減少してしまっただけで、現在、団体のメディアとしてのあり方について、あらためて体制を立て直している時期にあります。総会では情報リテラシーを含む規約の確認だけでなく、校正の方法や記事の書き方など新入生の育成にも力を入れています。

——塾内メディアに関わるいことになっ  
たきっかけと、将来どのような仕事に  
したいか教えてください。

**稲山** 私はメディアへの興味ではな  
く、どちらかと言えば組織運営に関心  
があり塾新に加わりました。現在も学  
生責任者として組織づくりや円滑に業  
務を進めるための仕事为中心です。と  
は言え時には義塾関係者を取材した  
り、広告主の方々とお会いしたり、個  
人だとなかなかできない貴重な経験を  
たくさんさせてもらいました。卒業後  
は学生責任者としての経験を生かし  
て、企業の経営や人事に関わる仕事に  
就きたいと思っています。

**鈴木** 私はジャーナリスト志望だった  
ので塾新に入りました。これまでたく  
さんの取材をしてわかったことは、相

商学部3年  
おかざわゆうすけ  
**岡澤侑祐君**



スポーツ新聞会 編集長・学生責任者

SFC CLIP 代表



総合政策学部3年  
ふかもちゆうこ  
**深町優雨君**

手からより深い話を引き出すためには  
「わかったふり、知ったかぶりをし  
てはダメ」ということ。この3年間「塾  
生に読んでもらえるコンテンツ」につ  
いて考え続けてきた結果、ジャーナリ  
ストではなく情報発信の環境整備を担  
当するプラットフォーム事業への関心  
が増し、今はそちらに進みたいと考え  
ています。

**岡澤** 私は慶應義塾高等学校時代の卓  
球部の先輩に誘われてケイスポに加わ  
りました。その先輩は昨年編集長を務  
め、今年は私が引き継ぎました。新聞  
制作は団体スポーツ同様、チームプレ  
イです。正確で面白い記事を作るため  
には、制作チーム内での意思疎通が必  
要不可欠。私は編集長を務めることで、  
編集スタッフに考えを伝えるコミュニ

ケーション能力やリーダーシップを磨  
くことができたと思っています。卒業  
後は編集長の経験を生かせる仕事を選  
びたいです。

**深町** 私は先輩に誘われてCLIPに  
参加しました。SFC関係者への取材  
は毎回わくわくしますし、撮影や校正  
など、さまざまな業務を経験し、取材  
のたびに成長を感じています。こうし  
た取材活動を通して知らず知らずのう  
ちに自身の視野が広がり、卒業後の進  
路の選択肢もずいぶん広まりました。  
CLIPには多様な学生が集まり、メ  
ディア系の仕事を希望する塾生もいま  
すが、先輩を見てみるとそれ以外の職  
種に就く人が多いように思います。私  
自身、現在はメディア企業、レジャー、  
エンタメ業界などとコンタクトを取り  
ながら、どんな仕事で自分に合ってい  
るのかを探している最中です。

——皆さんがメディアとしての使命感  
を抱き、取材や記事作成を楽しみなが  
ら情報発信を行っていることがよくわ  
かりました。本日はありがとうございました。



## ソーシャルメディアと慶應義塾

メディア・コミュニケーション研究所 教授

津田正太郎



X (旧Twitter) 上での義塾の評判は悪い。おそらく日本の大学で「一」を争うほどだ。

たしかに、特に高校野球部との関連で好意的な意見が聞かれることもある。しかし、ネガティブな書き込みが拡散されることがきわめて多い。

たとえば、Xで7・6万の「いいね」を集めたある投稿は、慶大生だと自慢してきた奴がいたら大学で何をしているのかを聞けばいい、ろくに勉強していないので黙らせることができる、という趣旨のものだ。

この投稿が典型だが、X上で拡散しやすい義塾のイメージは「実力もないのに学歴を鼻にかけた嫌な連中」である。それを「義塾に入れなかった者のひがみだ」と思われる方もいるかもしれない。しかし、その発想自体に、「慶應」の鼻持ちならなさがある」とみなされる。

こうした傾向に拍車をかけているのが、

三田会に対するイメージだ。社中協力により義塾関係者がお互いに助け合うのは、内側からみれば美德であり、筆者もそれに強く賛同する。しかし、外側から排他的な集団にみえてしまうのは避けられない部分もある。一例を挙げると、X上で2・9万の「いいね」がついた投稿には「慶應と三田会のノリがなんとなくウザいのは非慶應が全員思ってる真実」との記述がある。

しかも、三田会に対するこうしたイメージは、ある種の陰謀論と結びついてしまうことすらある。義塾の関係者であれば、三田会の力によって犯罪をもみ消してもらえらるというのだ。現実には義塾関係者のトラブルは、大学のネームバリューによって話題になりやすく、記憶にも残りがちのため、社会的制裁はむしろ重くなるとすら言える。以上のようなイメージの背景には、日本は格差社会だという発想の広がりがある。「親ガチャ」や「上級国民」という言葉の流

行にみられるように、生まれや所属によって不当な格差が生まれているとの感覚は多くの人がひとに共有されるようになった。義塾や三田会は格差を体現する存在とみなされているのだ。

もちろん、イメージはあくまでイメージでしかない。Xは良くも悪くも極論が幅をきかせる構造になっており、そうしたイメージが社会全体で共有されているとも限らない。

義塾ではさまざまな背景をもつ学生が学んでおり、筆者が勤務するメディア・コミュニケーション研究所の研究生も、向学心は強く、上記の偏見からは著しく乖離している。仮に、偏見にわずかであれ妥当性があったとしても、いま在学している若い塾生には何の責任もない。

上の世代の責任を押しつけるのははなはだ心苦しいが、塾生が運営するメディアには、偏見をはねのけるだけの力強さと堅実さを期待したい。